

歴史に残る 仕事は、

伝統や文化を重んじながらも、
変化することで受け継がれていく。

新しいことを試みようとする人を、異端児と呼ぶことがあります。常識にとらわれず、自由奔放に行動する人のことで、あまりいい意味では使われません。みな共有して生きていく社会では、常識は守らなければならないものです。けれども、時代の移り変わりとともに、常識も少しずつ変わっていきます。過去の常識にとらわれてばかりでは、どんなに歯を食いしばっても取り残されてしまいます。では、どうしたらよいのでしょうか。

左官技師士の秋土香平さんは、壁を塗る仕事という枠を超え、土を原料にした化粧品づくりや、アート作品をつくりました。御刀鍛冶工の二十五代藤原兼房さん、紙巻き職人の保木成敏さんは、伝統の技を受け継ぐだけでなく、後継者たちがそれを生業にできるように新しい用途の開拓に取り組みました。プーランジエの成瀬正さんは、リテイールベーカー（個人店）初のカリスマになり、歌舞伎役者の市川崑樹さんは、地歌舞伎でありながら国立劇場の大舞台を盛り上げました。劇作家・演出家のせせひろいちさんは、仕事との両立が難しかった芝居という芸術にたずさわる者がみな没頭できる理想の劇団をつくりあげました。それぞれが、時代の流れを感じ取って、伝統や文化を守りながら、少しずつ変化を続けている。そう、それまでの常識を壊すのではなく、常識の枠を広げているのです。

建具職人

谷口大輔 (28歳)

●たにぐちだいすけ

顧客ニーズが多様化する中、古風な建具と同時に新しいデザインの建具にも挑戦している。



夜ご飯を食べた後、さらに残業をして、全ての仕事の後に飲む一杯。「今日も終わったな」とその一杯を楽しんでいます。

